

阿木の夏秋トマト

岐阜県のトマト栽培は、大きく飛騨地方と東濃地方の夏秋トマト、海津郡（岐阜県南部）の冬春トマトにわけられます。海津郡の冬春トマトは昭和28年からトマトの早熟栽培を試行し、成功したのが始まりです（岐阜大学 応用生物科学部 園芸学研究室の福井博一教授の公式個人サイトより）。

東濃地方の夏秋トマト（岐阜県の夏秋トマトと言ってもよいのかもしれませんが）のはじまりは、中津川市阿木地区（当時阿木村）です。昭和30年に岩村高校農業科に通う阿木村広岡の花田美晴氏が先生の指導のもとホームプロジェクト（学校家庭クラブ）で露地トマト栽培をしたのがきっかけでした。

当時品種が少なく手に入る「ポンテローザ」と「世界一」の2品種のうち、「世界一」の苗を堆肥ポットで作ったところ良い苗ができ、水田で3畝200本露地栽培しました。成績がよく、収穫したトマトを阿木村、岩村町の商店や八百健市場にも出荷しました。米一俵が4000円の時代に3畝で15万円の収入がありました。県の高等学校農業クラブのホームプロジェクト発表会で花田は最優秀賞を獲得したそうです。

花田の実績に目を付けた阿木の農家が昭和30年から栽培に取り組み、昭和32年阿木村の広岡で六軒、山野田・真原で四軒の栽培農家ができ、大井町の市場に出荷したようです。露地トマトの問題は天候に左右されることですが、袋をかぶせることで裂

果、日焼け効果の発生防止を試みて効果があったといえます。日当1500円の当時、阿木のトマト700円/kgの高値となり収穫量、栽培面積も拡大していきました。

昭和35年に串原村もトマト栽培に取り組み始めました。

昭和36年には阿木村トマト生産組合を30戸0.8haでつくり、生産技術の向上に努め収量も増加したため、名古屋市枇杷島市場へ出荷するようになりました。昭和37年には栽培農家が80戸、栽培面積は4haまで伸び、昭和35年から43年にかけてほかの町村でもトマトの栽培をはじめようになりました。

昭和38年になると栽培規模も大きくなり、岐阜県園芸特産振興会が設立されました。中津川、神坂、蛭川でもこの年に栽培がはじまり、昭和39年には遠山（山岡町）で、昭和40年には本郷（岩村町）、福岡でも栽培がはじまりました。

阿木地区では生産者が100名となり、広岡協同組合、真原協同組合では共同栽培がはじまり、出荷量が多くなって栽培農家が冬中出荷シールを貼ったといえます。

昭和41年2月には加子母村トマト生産組合が発足し作付けがはじまりました。8月には、野菜指定産地「東農」、指定品目「夏秋トマト」となり、圃場を整備し充実させることができました。

昭和42年には落合で栽培がはじまりました。昭和43年には阿木地区は大阪市場に加え、北陸市場へも分荷、出荷を始め好評を

得ていきます。この年に付知町、坂下、恵那市中野方・飯地で栽培が始まりました。

昭和 44 年には恵那夏秋トマト振興会を設立し昭和 48 年には雨よけビニールハウス栽培が導入され普及していきました。

昭和 51 年には阿木地区広岡が第 2 次農業構造改革事業の指定を受け阿木ライスセンター横に選果場ができた。

生理障害等の打開として 15 アール(採算最低ライン)のパイプハウスを 3 年ごとに移動することで面積拡大を図っていきました。

昭和 43 年～昭和 54 年にかけて、各生産組合は近代化資金等により雨よけ栽培の普及に取り組んでいきます。昭和 53 年頃より、安全性・食味・栄養・品質が求められ、消費者からも着色率 90% のトマトの要望もできるようになりました。昭和 58 年に発表された完熟トマトの品種「桃太郎」が恵那地域にも普及し 52.6ha が切り替わりました。

昭和 35 年から本格的にトマト栽培をはじめ昭和 60 年で 25 周年を迎え、阿木地区だけで 8500 万円の出荷額となりました。

平成 8 年には栽培しやすい品種「桃太郎 8」に切り替わりました。

平成 10 年の農協の広域合併に合わせ、恵那夏秋トマト振興会も「東美濃夏秋トマト生産協議会」に再編されました。産地間競争や健康志向も高まり「安全・安心・健康」を目指した栽培の取りみかが進み、害虫対策のため防虫ネットのハウス全面被覆の実施やホルモン剤に替わるマルハナバチによる授粉なども実施するようになっていきます。

平成 12 年には作付面積の 3% で防虫ネットが、マルハナバチ 21 は作付面積の 13% で導入が進みました。

平成 15 年には岐阜県が薦める「ぎふクリーン農業」の認証を取得し「安全、安心、健康」プラス「おいしい」夏秋トマトの産地づくりに取り組んでいます(中津川市史下巻現代編 I 第 2 章第 1 節農業「阿木地区の夏秋トマト」より要約)。

令和 4 年の「農林水産統計」では夏秋トマトの生産量は 1 位が北海道、2 位茨城県、3 位熊本県で次いで 4 位が岐阜県です。県内の生産量でいう「令和 3 年産野菜市町村別統計(野菜指定産地に包括される市町村)」によると夏秋トマトの生産量は 1 位が高山市で 2 位が中津川市、3 位飛騨市、4 位下呂市となっています。

阿木地区は岐阜県における夏秋トマトの先駆地域であり、今も走りつづけています。

参考引用

中津川市 2012 『中津川市史 下巻現代編 I』
恵那の夏秋トマト(歴史編)編集委員会 2001
『恵那の夏秋トマト(歴史編) 40 年のあゆみ』